

戦後日本の住宅形式形成過程におけるアメリカ近代住宅の影響

藤木 忠善

—日本人に適した住宅原型提案への準備研究—

1. まえがき

日本人ほど、急激にその住宅形式を変えた民族は、他の国、他の文化圏には見当たらない。そして現在のようなリビング・ダイニングルームと個室で構成される住宅形式が果たして日本人にとって最終的なものなのかという疑問がある。私自身も実際の住宅設計を通して、その疑問から発した幾つかの実験的試み^{注1)}を行ってきた。そのような疑問に対して、現在の日本住宅の形式がどのように形成されてきたのかを明らかにできれば、新しい解決が期待できるのではないかというのが本研究の動機である。

明治以来の近代化の中で、欧米の影響と伝統との多様な結合と融合を試行し、模索していた日本の住宅形式^{注2)}が、戦後、極めて短期間のうちに伝統を捨て、現在のような形式に取れんしたのはなぜか。その原因の最も大きいものの一つに、当時のアメリカ近代住宅の情報による影響があると考えられる。そこで、その情報媒体を明らかにし、影響を被った点について考察を加えることが本研究の目的である。更に、本研究を将来の日本人に適した住宅の原型提案に結び付けることを目標としている。

まず、日本の住宅形式のアメリカ化促進の背景について考察し、次に影響源である当時のアメリカの住宅近代化の状況を文献により調査した。そして、その情報が大量に流れ込んだ戦後の20年を対象期間^{注3)}として、アメリカ近代住宅とその考え方を紹介、奨励した文献、博覧会記録などの調査を行い、影響を与えた媒体を多面的に研究した。更に、同時期の住宅の実例については、アメリカ人の関与した住宅と日本の建築家作品、商品住宅について関係者への面接などの調査・分析を行った。次に、平面計画、リビングルームを中心にアメリカの影響について検証した。最後に、本研究の結果と現状調査の結果とを比較し、その問題点について考察した。研究対象の選択については、当時いち早く情報に接した建築家による住宅を中心とし、必要に応じて住宅金融公庫や住宅会社による住宅などの一般例を加えた。

2. 社会背景

戦後の6年間は連合軍による被占領期間であり、その間、日本全体がGHQの文化政策の強い影響を受けなが

ら新しい社会の建設に向かった時期である。アメリカの生活文化も、映画や翻訳雑誌、あるいは渡米経験者や知識人が寄稿する雑誌などによって広く紹介され、強い憧れをもって受け入れられた。中でも、日本の住宅形式のアメリカ化促進の背景となったものに、新しい家族像の誕生と女性の解放がある。

戦後の民法改正による「家」社会の崩壊、厳しい経済状況、都市化という流れの中で、親族的血縁関係から独立した「核家族」が増加した。このような核家族も社会の基礎単位であるという観点から、家庭内にも社会性を持ち込み、個人の自覚を促そうとする動きがあった^{注4)}。そこではアメリカの生活様式が参考にされ、家族が共有する団らんの場合としてのリビングルームの重視、公私室の分化が推奨された。また、家族関係も夫婦+子供という意識が強まり、両者のプライバシーを重視する傾向から個室化が進んだ。家庭教育の面からも子供の社会性・独立性を尊重して子供室が推奨された。

女性の参政権や婚姻制度の改革、男女同権思想の普及が進む一方で、女性の地位向上は家庭内でも進められ、アメリカ婦人の家庭生活などが積極的に紹介された。ここでは、合理的生活のための台所や収納空間の改善、日々の生活プランの立て方などに関心が集まり、家事労働を軽減するための家電製品の導入、あるいは家族で家事を分担するなど、アメリカを参考に提案されている^{注5)}。

3. アメリカにおける住宅近代化

日本の住宅形式におけるアメリカの影響について論じる前に、その影響源と考えられる「アメリカ近代住宅」について、生成の経緯とその内容を明らかにする。また、アメリカの近代住宅の平面と戦前の日本に影響を与えた西欧住宅のそれとを比較し、その相違について考察する。

アメリカの住宅近代化の出発点として考えられるのは、1932年にニューヨーク近代美術館で開かれたインターナショナル・スタイル展である。そこに展示された近代建築の数々はアメリカの建築家たちに大きな影響を与えた。次いで重要な役割を果たしたのが、1930年代末ドイツから渡米したバウハウスの建築家W.グロピウス、M.ブロイヤー、M.v.d.ローエである。彼らはヨーロッパの住宅近代化の考えを工業力のあるアメリカに持ち込み、

ヨーロッパの古い伝統から解放されて、住宅や家具の分野で新しい試みを次々に実践し強い影響力を持った。

特に W.グロピウスの組織した TAC⁽¹⁶⁾ や、M.ブロイヤーは、理論としての近代住宅を魅力ある実例として示した。一方で、アメリカ生れの建築家である F.L.ライトは1900年初頭に、アメリカ人の基本的な家として、比較的オープンなプランである「プレイリー・ハウス」を主張した。その考えは30年代のプレファブ化による庶民のための「ユーソニアン・ハウス」へと展開する。ヨーロッパ生れの R.J.ノイトラは F.L.ライトに学び、1920年代にカリフォルニアの地において、ヨーロッパの近代建築の理論を住宅として開花させる。M.v.d.ローエのファンズワース邸に見られる鉄とガラスの洗練された純粹性が R.J.ノイトラらの追及した形態や材料の単純化に加わり、ケース・スタディ・ハウス⁽¹⁷⁾ での若い建築家のデザインの素地を形成する。

建築家の個々の動きのほかに、より影響力のある、住宅近代化を推進するイベントが各地で開かれた。シカゴ・トリビューン誌主催の終戦直後の住宅コンペ⁽¹⁸⁾、建築雑誌主催の若手建築家による実験住宅であるケース・スタディ・ハウスの建設、ニューヨーク近代美術館のモデルハウス展示⁽¹⁹⁾、全米住宅協会の住宅コンペ⁽²⁰⁾、ニューヨーク、グッゲンハイム美術館での F.L.ライト展におけるユーソニアン住宅の展示、アメリカ建築家協会の住宅コンペ⁽²¹⁾ などがそれぞれである (図3-1~4)。

大衆住宅においては、戦後の大量な住宅供給のために、工業化によるローコスト化や工期の短縮といった近代化が進められた。ラストロン⁽²²⁾、テックビルト、アルコア、エイコンなどの会社が商品住宅を開発販売し、全米住宅協会においても実験住宅による工業化が試行された⁽²³⁾ (図3-5, 6)。生産性追求のため、商品住宅の平面型もホール+パーラー型からバンガロー型のようなリビングルームを持つ単純な平面型へと移行していった⁽²⁴⁾。

以上のようなアメリカの住宅近代化の基本的考え方を整理すると、①あまり大きくなく、使用人なしで維持管理できること。②台所と収納空間の合理的配置など、家事労働軽減の重視。③プレールーム、ホビールームなどによる育児への対応。④単純でフレキシブルなプランによる将来の家族構成やライフスタイルの変化への対応。⑤工業化や安価な材料の利用によるローコスト化などである。

また、上記の住宅近代化の考え方は、平面において具体的に次のような特徴として表れている。①リビング・ダイニングルームと個室の公私室分離型平面、②玄関から直接リビング・ダイニングルームに入り (以下、リビング直入玄関)、そこから寝室、子供室に至る動線を持つ。③廊下は少なく、寝室、子供室の前には浴室をつな

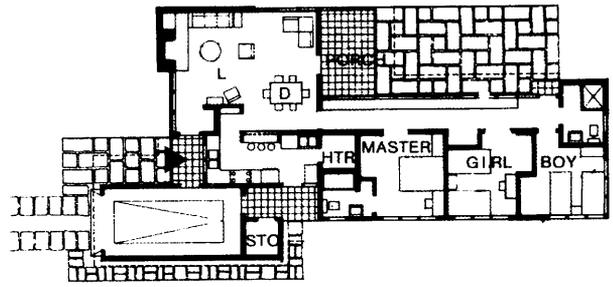


図3-1 シカゴトリビューン誌住宅コンペ入選案, ヘイト・アソシエイツ, 1945 (平面構成図6章参照)

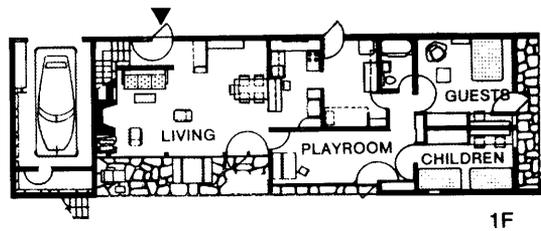


図3-2 ニューヨーク近代美術館展示住宅, M.ブロイヤー, 1949

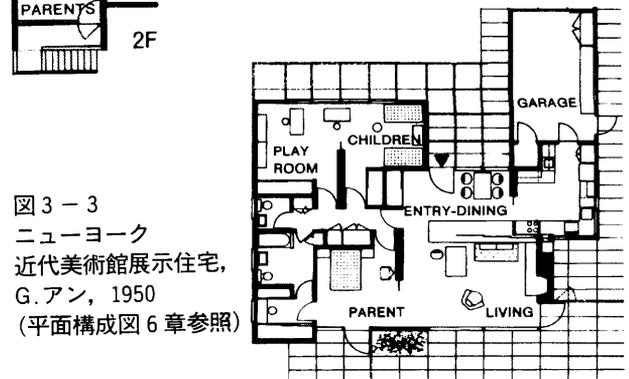


図3-3 ニューヨーク近代美術館展示住宅, G.アン, 1950 (平面構成図6章参照)

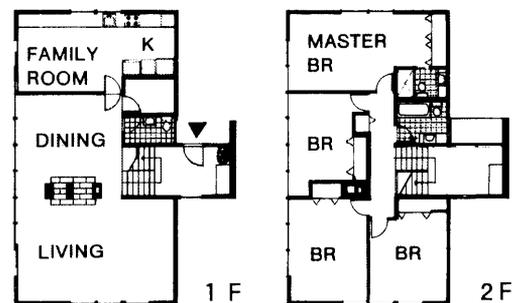


図3-4 アメリカ建築家協会住宅コンペ入選案, R.コール, 1960

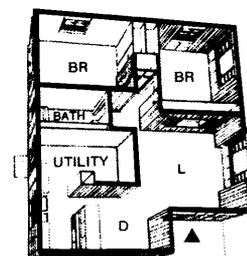


図3-5 ラストロン・ホーム, 1947

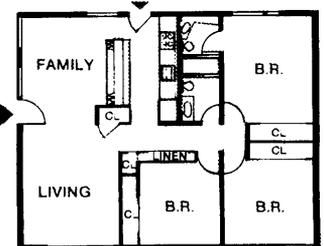


図3-6 全米住宅協会実験住宅, 1953 (平面構成図6章参照)

ぎ、リビングルームに至るプライバシーの高い廊下（以下、私的廊下）がある。④台所はリビング・ダイニングルームに対してセミオープンが多い。⑤子供室は個室が原則だが、一部がつながる個室、二人部屋、寝る場所のみ独立で活動スペースは共用など、育児への多様な工夫がある（図3-2, 3参照）。⑥浴室は私室側に配置され、主寝室には専用浴室が多い。また、洗面器・便器を備えたフル・バスルームが多く、いずれも密室的空間（6章参照）である。⑦ガレージ回りの生活上有効な配置（物置、台所との関係）、⑧ユーティリティ、ランドリーの設置。

これにひきかえ、西欧型平面ⁱ¹⁵⁾といわれているものでは、リビングルームはダイニングルームと分かれているものが多く、台所は主に独立型である。また、アメリカ近代住宅では見られない、浴室と便所が分離した例もある。玄関はホールとして独立し、これに続く廊下（以下、公的廊下）に寝室、子供室、浴室が配置されている。同じ公私分離型平面でも、リビングルームを通らず外出できるため個室の独立性が高く、その意識はリビングルーム中心のアメリカ近代住宅とは異なるⁱ¹⁶⁾（図3-7, 8）。

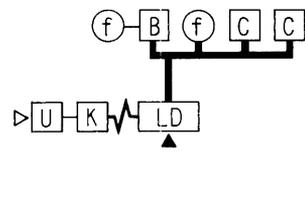


図3-7 アメリカ近代住宅例
平面構成図（6章参照）

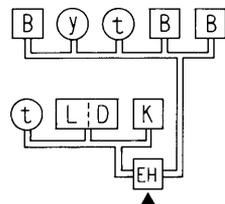


図3-8 西欧型住宅例
平面構成図

4. アメリカ近代住宅の日本への移入

戦後期に、アメリカの近代住宅がいかにして日本に伝えられ、日本の住宅形式にどのように影響を与えてきたのであろうか。ここでは、その情報の伝えられ方、受け取られ方、また、それらの情報の中で推奨されたものを明らかにするために、媒体となった文献、博覧会・展覧会などについて調査した結果について考察する。

アメリカの近代住宅の情報の広い意味での伝搬は、住宅に関する書籍、建築雑誌、住宅雑誌、家庭雑誌の輸入再開と、復刊あるいは創刊ⁱ¹⁷⁾された日本の建築雑誌による、それらの情報源の翻訳紹介記事の掲載によって始まった。中でも当時の海外建築情報専門誌であった『国際建築』は1950年の復刊から5年の間にアメリカ近代住宅に関する論文31点と、住宅87点を精力的に紹介しているⁱ¹⁸⁾。

このほか、1950年に開催された「アメリカ博覧会」ⁱ¹⁹⁾において、アメリカの建築家M.プロイヤー設計の住宅とC.コッホ設計のswanscottの住宅を原案とした2棟のモデルハウスが、前者は大林組、後者は竹中工務店によって建てられ会場に展示されたⁱ²⁰⁾（図4-1, 2）。

前者は1949年にニューヨーク近代美術館の庭園に建てられたモデルハウス「成長する家族のための住宅」（図3-2参照）の一部を変更したものと考えられる。いずれも広々としたリビング・ダイニングルーム、蛍光灯による間接照明、靴履きの、椅子とベッドの生活が実物として大衆の目に触れた。その平面はアメリカ近代住宅の平面（3章参照）を具現化したものであった。

また、占領という条件下で駐留基地内の「進駐軍家族住宅」の設計・建設（5章で詳述）が日本人の手によって行われた。従来の部屋を付加していく凸凹の多い平面を持つ日本住宅と比較して、その標準型は矩形分割型の単純な平面を持ち、経済的な住宅として推奨されているⁱ²¹⁾（図4-3）。また、この「進駐軍家族住宅」に関与した日本の建築家による住宅近代化の啓蒙記事や計画案の発表、百貨店における住宅展のモデルハウス設計などによりアメリカの住宅の情報伝達があるⁱ²²⁾。

このようなアメリカ近代住宅に関する情報伝達の波によって、当時日本の住宅の近代化を推し進めようとしていた建築家、研究者が推奨した点は、およそ次の通りである。①封建性打破ということからのリビング直入玄関ⁱ²³⁾、②民主的な家族と接客のための理想空間としてのリビングルームⁱ²⁴⁾、③活動的な生活という機能面からの椅子座の食卓ⁱ²⁵⁾、コタツの否定、全体暖房設備の設置、④子供の人格の尊重、及び、教育的配慮からの子供室の個室化ⁱ²⁶⁾、⑤家事労働の軽減のための機能的な台所配置と設備の改善ⁱ²⁷⁾、給湯設備の設置、⑥収納の合理化ⁱ²⁸⁾、⑦衛生面からの畳、和寝具の否定とベッドの採用ⁱ²⁹⁾、⑧洋式水洗便所ⁱ³⁰⁾、⑨快適化のための間接照明、壁付灯、

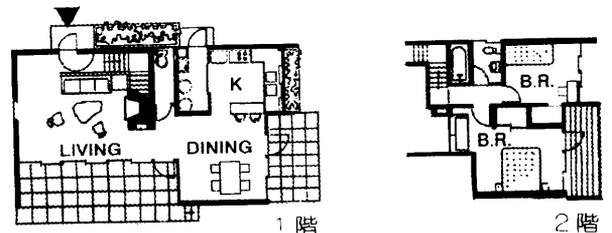


図4-1 アメリカ博展示住宅、大林組、1950

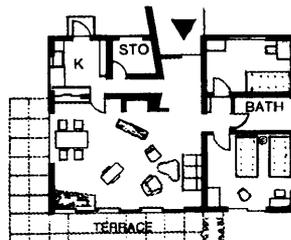


図4-2 アメリカ博展示住宅、C.コッホ原案、竹中工務店、1950

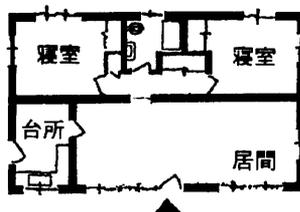


図4-3 『主婦の友』に掲載された「経済的な間取り」の例、1960

フロアスタンドなど照明の適正配置ⁱⁱ³¹⁾。

一方で建築雑誌の主催する新しい国民住宅を目指すコンペも終戦直後から度々行われ、上述したような近代化の動きに^{こた}える案が提案されたⁱⁱ³²⁾。また、日本の建築家の手による具体的な夢の住宅の計画案として、アメリカ近代住宅の傑作を規模や設備の面から当時の日本のレベルに翻案したプラン(図4-4)、アメリカ近代住宅の考え方による日本人向けのプランなどが住宅雑誌の記事、あるいは住宅図集として数多く出版されたⁱⁱ³³⁾。そのようなプランの共通した一つの傾向は、ガラスを多用した、間仕切りや物入れの少ないオープンなプランである。なかには天井まで達する間仕切りはバスルームだけというプランも見られる。これは住宅雑誌の啓蒙記事や論文で紹介され、奨励された個室化や収納の合理化とは相反するものである。このズレの原因は建築家の持つ、無限定で流れるような伝統的空間への指向と、当時発表され、その単純さ、純粹さから日本の建築家に衝撃を与えたP.ジョンソンのグラスハウスとM.v.d.ローエのファンスワース邸の影響にあると考えられる。

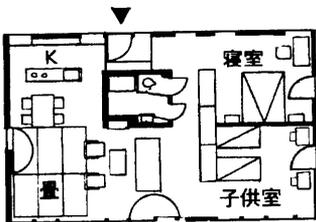


図4-4 『モダンリビング』に掲載された「P.ジョンソンのグラスハウス」の翻案例, 1951

5. アメリカ的住宅形式の実現

戦後、アメリカの住宅近代化の情報が伝わり始めてから、その実例と影響を受けた作品が実際に建設され、建築雑誌に発表されるようになったのは1940年代後半である。それまでの計画案と違って、実現された建築家の手になるその住宅は情報源の少ない状況の中で、こぞって建築雑誌に取り上げられ周知されたことから二次的にアメリカの影響を及ぼした媒体と考えられる。ここでは当時の実現例の中から、アメリカ人の関与したものとして、進駐軍家族住宅、アメリカ人建築家による住宅を選び、影響を受けた作品として日本人建築家による最小限住宅、住宅メーカーによる商品住宅を選んでいる。

5-1 進駐軍家族住宅-DEPENDENTS HOUSE

これは「DEPENDENTS HOUSING」と呼ばれる基地内の総合団地計画の一部をなす住宅のことである。進駐軍将兵とその家族が日本及び韓国の基地内で居住するための施設である。終戦直後、GHQの指導で当時の限られた日本の資材と設計・施工技術により、アメリカ人が生活し得る住宅・家具・什器^{じゅうき}をデザインし製造することを目的とした。住宅は志村太七を中心とする14人ⁱⁱ³⁴⁾の

日本人建築家がチームを組んで設計に当たった。それは日本各地に建設され、その一部は現在も使用されている。この住宅と、そこで展開された生活は、その設計・建設・製造に携わった人や、それに接した日本人を通して一般の日本人に伝えられ、アメリカ式ライフスタイルの日本への定着に直接・間接の影響を与えたと考えられる。

GHQが求めた条件は、アメリカ人の生活様式を満たすような建物で、団地計画を考慮にいった矩形の平面、リビング直入玄関、家具の配置から決められた各部屋の面積形状、廊下の少ない平面などであった。平面は入居者の官位、家族数により9タイプあるが、いずれも公私室分離型の単純なプランで広いリビング・ダイニングルームを特徴とする。個室化された寝室、私的廊下の存在、浴室の私室ゾーンへの配置、フル・バスルームなどのアメリカ近代住宅の平面原理が見られる。台所は使用人制のため独立型になっている(図5-1, 2)。

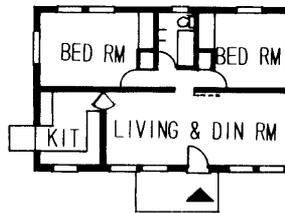


図5-1 進駐軍家族住宅, A-1型

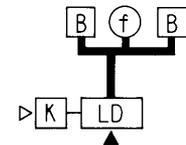


図5-2 同平面構成図 (6章参照)

5-2 A.レーモンドによる住宅

A.レーモンドは戦前から日本で設計活動をしたチェコ生れのアメリカ人建築家である。まだ日本の住宅事情が良くない戦後期に、在日アメリカ人のための多くの高水準な住宅を設計して、日本風なデザインとアメリカ式のライフスタイルの調和を示し、その実物を通して日本の建築家にアメリカ近代住宅の手本を示したⁱⁱ³⁵⁾。

ここでは戦後の代表作と見られるサロモン邸(図5-3)と別荘の軽井沢ハウス(図5-4)を選んでいる。いずれも内外のデザインには日本の傾向が見られるものの、公私室分離型の明快なプラン、リビング直入玄関、広いリビング・ダイニングルーム、セミオープン^{そろ}の台所(後者)、私的廊下、浴室の私室ゾーンへの配置、個室化など、当然のことながらアメリカの近代住宅の条件がすべて揃っている。

5-3 最小限住宅

戦後間もなくの1950~52年の3年間に発表され実現した最小限住宅(図5-5~8)は池辺陽の立体最小限住宅、坂倉準三の加納邸ⁱⁱ³⁶⁾、増沢洵自邸、山口文象の高橋邸ⁱⁱ³⁷⁾である。ここでいう最小限住宅とは、その名を冠していなくとも設計者が「文化的な暮らしをするのに、最低これくらいは必要である」と考えて設計された住宅を指し、いわゆる終戦直後の狭小、極小住宅は除く。

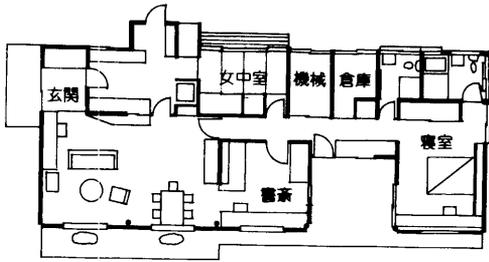


図5-3 サロモン邸, A.レーモンド, 1953

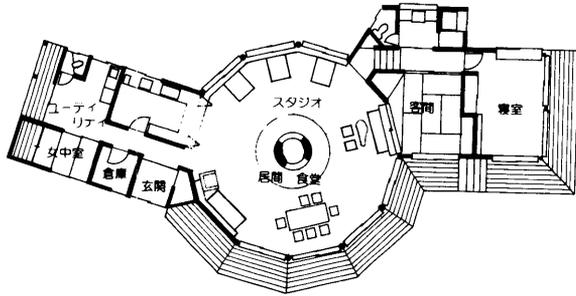


図5-4 軽井沢ハウス, A.レーモンド, 1963

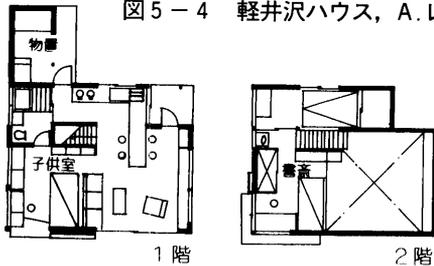


図5-5 立体最小限住宅 (14.2坪), 池辺陽, 1950

(平面構成図6章)

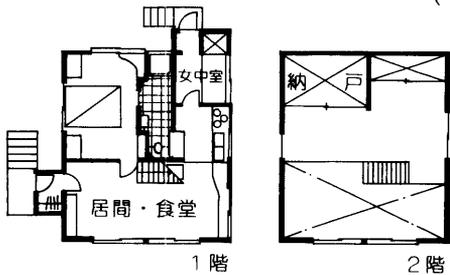


図5-6 加納邸 (18坪) 坂倉準三, 1950

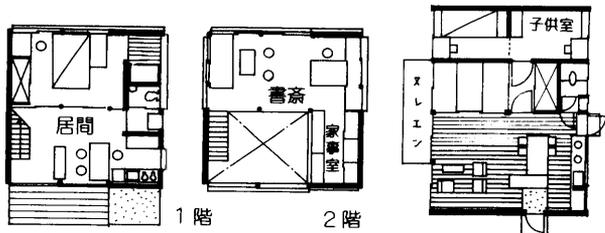


図5-7 増沢邸 (15坪) 増沢洵, 1950

図5-8 高橋邸 (12坪) 山口文象, 1952

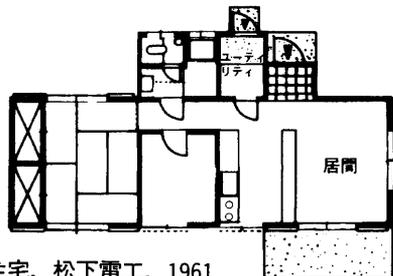


図5-9 松下1号住宅, 松下電工, 1961

いずれも作品性の高い個性的な住宅である。しかし、その平面を見ると、共通してアメリカの近代住宅の平面原理である公私分化、リビング直入玄関、リビング・ダイニング・グールの採用、全体暖房（ストーブの計画的配置）、セミオープンな台所、寝室・子供室の個室化、私的廊下、浴室・便所と寝室の強い結合、浴室のフル・バスルーム化や一体化などの点に苦心が払われている。

5-4 商品住宅

住宅メーカーによる商品住宅はプレファブ住宅と呼ばれ、1950年代後半から住宅供給の担い手として登場してくる。当初は和室中心の平面であった商品住宅が、アメリカの住宅形式を採り入れ始めたのは1960年代前半と見られる。ここでは、その当時の大手メーカーの標準タイプ（図5-9）の商品住宅を取り上げている。

まだ和室が見られるものの、アメリカ近代住宅の平面原理のうち、リビング直入玄関及び私的廊下、セミオープンな台所、浴室の私室ゾーンへの配置などが既に試みられている。しかし、住宅が2階建てになり、上下階で公私分化が行われ、浴室の2階私室ゾーンへの配置、すべての部屋が洋室化されるなど、アメリカの住宅形式が完成するのは1970年代後半になる^[38]。

6. 平面計画におけるアメリカの影響

対象期間における(A) 建築家による平面、(B) 住宅金融公庫標準平面、(C) 住宅会社による平面の三者から175例^[39]を選び、平面構成図^[40]により分析した。日米の参考例（図6-1~4）と、分析対象の住宅から8例（図6-5~12）の平面構成図を掲げる。

3章の研究結果からアメリカ近代住宅の特徴と見られる要素を次のように定めた。①公私分化の明確化、②リビング・ダイニング・グールまたはリビング・ダイニング・グール（DKのみの場合及びLDKを除く）、③リビング直入玄関、④セミオープンな台所、⑤寝室、子供室の個室化が完全に近く行われているもの、⑥私的廊下があるもの、⑦浴室の配置が私室ゾーンになされているもの、⑧フル・バスルーム、または、浴室・洗面所・便所が一体化しているもの。以上の8項目について、その普及度をまとめたのが表6-1である。リビング・ダイニング・グールは建築家の作品、住宅金融公庫、住宅会社に共通して高い普及率を示す。建築家の住宅平面では各項に平均して普及率が高く、特に個室化の高率が目立つ。住宅金融公庫の平面では全項目を通じて普及率は低い。住宅会社の平面ではリビング・ダイニング・グールとセミオープンな台所の普及率が高く、大衆のアメリカ指向への対応が見られる。

この表に見られる分析結果を影響パターンに従って考察すると、全般的に受け入れられたアメリカ近代住宅の要素は、家族団らんと接客の空間としてのリビング・ダ

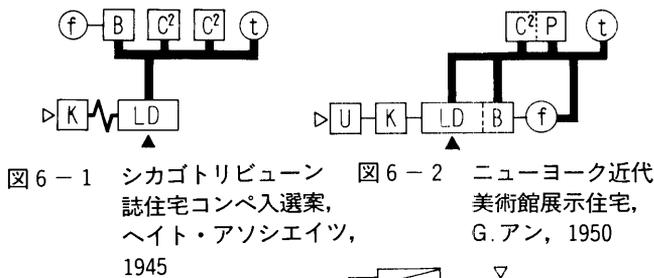


図6-1 シカゴトリビューン誌住宅コンペ入選案，ヘイト・アソシエイツ，1945
 図6-2 ニューヨーク近代美術館展示住宅，G.アン，1950

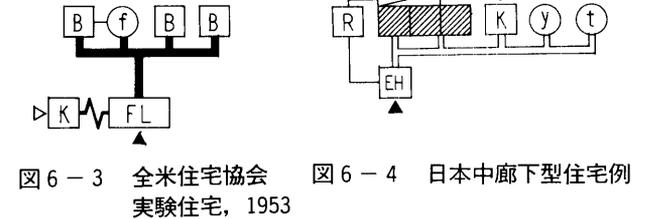


図6-3 全米住宅協会実験住宅，1953
 図6-4 日本中廊下型住宅例

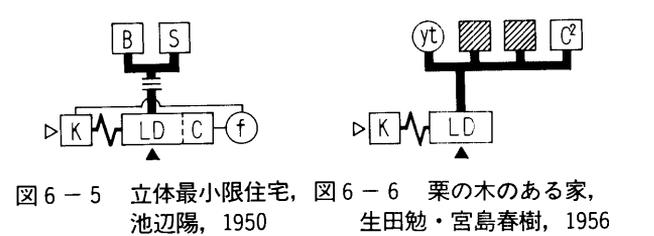


図6-5 立体最小限住宅，1950
 図6-6 栗の木のある家，生田勉・宮島春樹，1956

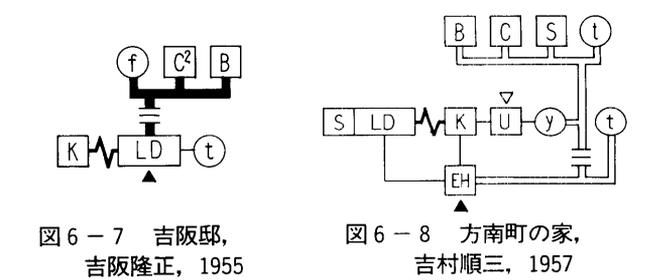


図6-7 吉阪邸，吉阪隆正，1955
 図6-8 方南町の家，吉村順三，1957

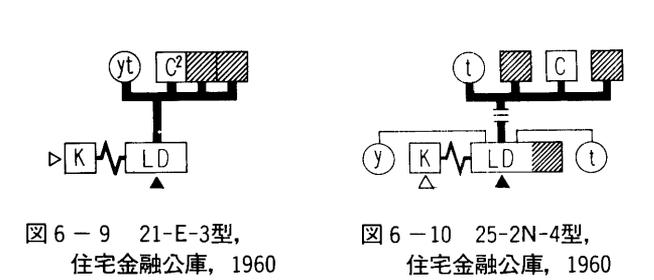


図6-9 21-E-3型，住宅金融公庫，1960
 図6-10 25-2N-4型，住宅金融公庫，1960

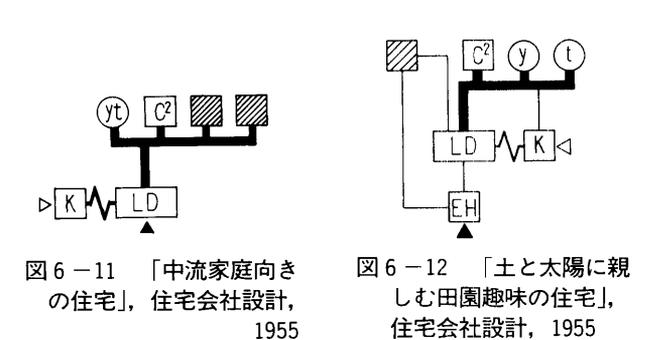


図6-11 「中流家庭向けの住宅」，住宅会社設計，1955
 図6-12 「土と太陽に親しむ田園趣味の住宅」，住宅会社設計，1955

■平面構成図凡例

	和室		玄関室 (小ホール型)		玄関 (廊下型)		リビングルーム		ダイニングルーム		台所		ユーティリティ
	家族室		応接室		寝室		書斎		プレイルーム		子供室		子供室 (2BEDS)
	縁側		フルバスルーム		浴室		便所		浴室・洗面所・便所		私的廊下		公的廊下
	連結 (ドア等)		階段		ヒミオプンの台所		引戸開付切		襖・障子開付切		玄関口		勝手口

表6-1 「アメリカ近代住宅の特徴」の普及率比較 (%)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
(A)	47	80	41	49	78	39	43	37
(B)	9	29	10	19	16	10	10	16
(C)	10	55	15	53	41	12	12	22

※網掛けは各項の最高率を示す

イニングルームと、対面型やハッチ・カウンター型などのセミオープン形式の台所であり、家族の団らんに加わりながら作業ができる点が歓迎された。それを可能にしたのは換気扇などの設備機器の普及である⁽⁴¹⁾。子供室の個室化は、狭い面積の中で、むしろアメリカよりも強力に進められ、上下入れ違い式のベッドによる分割方法などが考案された。通り抜けアクセスや縁側に面したプライバシーのあいまいな子供室⁽⁴²⁾は姿を消した。このほか、置き家具に代えてワードローブなどの造付け家具が登場し、収納の合理性の面から押入や納戸が否定された。

アメリカ的傾向の中で、建築家の作品には受け入れられたが、一般化しなかった要素としてリビング直入玄関がある。これは当初、民主的ということから積極的に用いられたが、間もなく伝統的な玄関が復活した(7章参照)。また、最初に建築家に受け入れられ、後になって一般化した要素としてフル・バスルームあるいは浴室・洗面所・便所の一体化⁽⁴³⁾、浴室の2階私室ゾーンへの配置がある⁽⁴⁴⁾。これは浴室機材の開発が遅れたこと、住宅水準の向上とともに、土地の狭あい化が進み2階建てが増加し、木造住宅における防水の難しさなどの技術的な理由によると考えられる。フル・バスルームあるいは浴室・洗面所・便所の一体化などは、いずれも浴室の密室化ととらえることができる。ここでいう密室化とは、浴室の堅固な間仕切り構造と、奥まった私室ゾーン配置のため、入浴中はリビングルームや台所にいる家族とのコミュニケーションが困難になったことを指す。これは生活の楽しさと便利さ、浴室事故⁽⁴⁵⁾の防止の点から好ましくない。更に、実現しなかった要素として、①ガレージ回り(物置、台所との関係)の生活上有効な配置(図3-1, 3参照)、②育児のためのプレイルームやホビールーム(図3-2参照)、③ユーティリティ、ランドリーなどがある。①は当時、自家用車が普及していなかったうえ、余暇も少なかったこと。②は少ない面積の中で個室化のほうに緊急課題であったこと。③は洗濯機、乾燥機、住宅設備の未発達がその要因であると考えられる。

7. リビングルームの問題点

前章における研究の結果から、建築家設計の住宅において急速にリビングルームが茶の間、座敷、縁側にとって代わったことが日本の住宅形式におけるアメリカの影響の代表的な変化であるといえる^{注46)}。これを、内外空間の関係と家具配置の点から考察し、伝統的形式の利点との比較を通して、その問題点を論ずる。

7-1 内外空間の関係について

日本の伝統的な屋内・屋外の区切り方は、ガラスや壁ではなく空間的な領域を持った仕切り方であり、それらはすべてプライバシーの調節装置^{注47)}としての意味を持つ中間領域である。日本ではアメリカ近代住宅に見られるような街路からリビングルームへの直接的で単純なアプローチは少ない。この彼我の意識の違いがリビングルームに問題を与えている。

門から座敷に至る中間領域のあり方を例として、日米の違いを比較したのが表7-1である。表中の「緩衝」とは、外来者の視線、気配を遮るものを指している(図7-1)^{注48)}。アメリカにおけるシカゴ・トリビューン誌主催のコンペでは、西欧型の平面形式である公的廊下接続型玄関がまだ数例見られる。しかし、5年後の全米住宅協会コンペでは、すべてリビング直入玄関へと移行している。一方、日本では、住宅会社設計の住宅には公的廊下接続型の玄関と門扉の両方を設けた例が見られ、戦前の住宅形式の継続がうかがえる。建築家設計の住宅ではリビング直入玄関が多くなっているが、しかし、玄関室もしくは門扉の少なくともどちらか一方を設けようとしており、中間領域的意識の残存と考えられる。

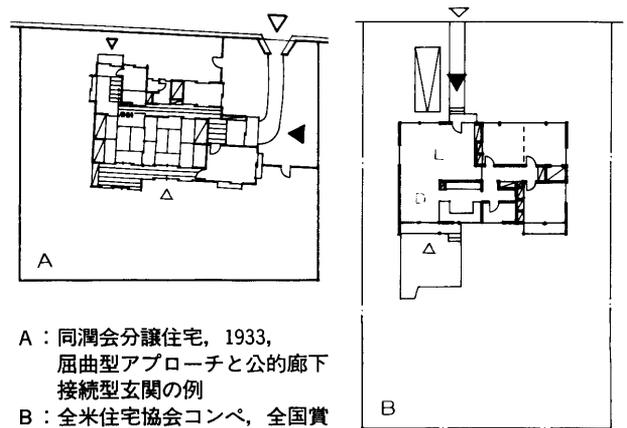
日本人にとって、屈曲による多くの領域を持つ、門から座敷に至るアプローチと玄関は、そこで履物を脱ぐ行為を含めて一つの間領域である。伝統的玄関での接客は、敷居越し、土間と式台での対応、部屋に通すという段階がある。リビング直入玄関の場合、そのような調節が利かず、中間領域の働きをしない。これが時代とともに公的廊下接続型に回帰した要因の一つと考えられる。アメリカにおいてもプライバシーの点から1950年代初めに既にその改善を求めた例がある^{注49)}。

一方、リビングルームの出現により中間領域としての縁側も消滅した。それは気候調節、動線という役割のほか、家族各人のさまざまなくつろぎ、接客の性質に応じて、障子や襖を^{ふすま}開閉して、次の間、座敷と連続させ、多様に変化させることができる団らんや接客の場所であった。南側アプローチの場合でも座敷との境には障子があり、たとえ開けてあっても家の中が丸見えということはない。これも中間領域の利点である^{注50)}。このような縁側の有効性に比べ、現在のリビングルームでは、南側における生活の展開は単調で限定的なものになっている。

表7-1 リビングルームと街路の関係

リビングルームと玄関の関係				直入型		公的廊下		合計	
				緩衝	有	有	無		
街路と玄関の関係				家具等	玄関室	接続型	型		
アメリカ シカゴトリビューン誌 住宅コンペ 1945	門扉	無	アブ	直進型	6	4	1	1	13
			ローチ	屈曲型				1	
	有	アブ	直進型	1	1		1		
		ローチ	屈曲型					3	
合計					13	3		16	
アメリカ 全米住宅協会 コンペ 1950	門扉	無	アブ	直進型	6	12			26
			ローチ	屈曲型	3	5			
	有	アブ	直進型	1	1				
		ローチ	屈曲型		1			3	
合計					29	0		29	
日本 建築家設計の 住宅 1945~64	門扉	無	アブ	直進型			2	2	8
			ローチ	屈曲型		1	2	1	
	有	アブ	直進型	1	1	2	3		
		ローチ	屈曲型	4	1	2	5		
合計					16	11		27	
日本 住宅会社設計の 住宅 1955	門扉	無	アブ	直進型					0
			ローチ	屈曲型					
	有	アブ	直進型	1	2	1	2		
		ローチ	屈曲型	1			5		
合計					5	7		12	

20%以上 1~20% (数値は例数)



A : 同潤会分譲住宅, 1933, 屈曲型アプローチと公的廊下接続型玄関の例
B : 全米住宅協会コンペ, 全国賞佳作, M.P.ロウリー, 1951 直進型アプローチとリビング直入型玄関の例

図7-1 座敷・リビングルームと街路の関係

日本のリビングルームに少なからぬ影響を与えたものに、アメリカ近代住宅の特徴であるガラスの積極的利用による内外空間の視覚的連続がある。それは日本の空間の系譜とされるが、ガラスで仕切られ、ドアから出入りする関係は、それとは異質であり、その前に設けられたテラスも中間領域というより戸外の独立した領域ととらえられる(図3-1, 2参照)。大きな開口部を持ちながら中間領域を持たないリビングルームは、伝統的な住宅の茶の間、座敷に比べ、まぶしく、落ち着かない空間になり、更に、プライバシーの点からも問題が多い。

7-2 家具配置について

アメリカの影響の象徴であるはずの日本のリビングルームは、その使われ方については必ずしもアメリカのごとくにはなっていない。そこで、アメリカ近代住宅における家具のあり方を明らかにし、次いで図面上に描かれた家具配置について日米の意識を比較し問題点を考察する。

アメリカの住宅近代化については3章で触れたが、それと軌を一にして、家具デザインの近代化の動きもあった。その一つが1948年のローコスト家具のコンペである。椅子と収納の2部門があり、活動的な生活に適した廉価で、自由な使い方ができる家具が要求された⁽ⁱ⁵¹⁾。

日本に紹介されたアメリカ近代住宅の平面図も、その多くは、家具配置を詳しく記入しており、住宅における家具の重要性が理解される。また、タイムセーバー・スタンダード⁽ⁱ⁵²⁾の住宅家具配置の項では、暖炉中心の壁際のレイアウト例(図7-2)を掲げ、家具配置と部屋の寸法形状の関係を示し、椅子の対面型配置はなく、部屋の中央が空いているのが特徴である。

アメリカのリビングルームにおける壁際利用型家具配置と比較すると、日本のそれは、中央利用型といえる(表7-2)⁽ⁱ⁵³⁾。その多くは「応接セット」と呼ばれるソファとアームチェアとティーテーブルの組合せによるテーブルを挟んだ正対型、求心型の配置をとる。そのために部屋の面的利用の例は少ない。また、家族一人一人が別々の行為と、それに適した姿勢を求める「気楽な接客や団らん」には、ぎこちない感じと不便さがある⁽ⁱ⁵⁴⁾。

そのために椅子があるにもかかわらず、床に座る例もしばしばあり、この中央利用型家具配置がリビングルームに続く和室の必要を感じさせる要因になっているとも考えられる。

このような日米の相違を、リビング・ダイニングルームを例に以下のような方法による分析を試みることでその内容を明らかにした。すべての椅子に人が腰掛けていると仮定し、最大の面積を内包するようにその頭を結ぶ線を「干渉線」とし、これに囲まれる範囲を「干渉域」とする。これを部屋にいる人たちの相互関係によって作り出される、ある雰囲気を持った領域と見なす。これとは別に、パーティーやダンス、子供の遊びなどに有効なスペースを「残余床」とすると、干渉域と残余床との間

には、残余床が、(A) 干渉域の中央付近にあるか、またはまたがっている、(B) 干渉域内に偏在、(C) 干渉域外に存在、(D) 発生しない、の関係が考えられる(図7-3)。これらの関係において干渉域は、中央付近に残余床を持ち、残余床が大きくなるほど壁際利用型家具配置に近付くと考えられる(A)。これに対して、残余床と離れているか、もしくは残余床を生じない場合には中央利用型家具配置に近付くと考えられる(D)(表7-3)。

次に、日本で中央利用型家具配置が好まれる原因について考えてみると、①椅子の伝統がなく、取りあえず戦前の「応接間」の家具配置が入門しやすく参考にされた。②リビングルームに多目的室としての収納⁽ⁱ⁵⁵⁾が考えられておらず、壁際を置き家具が占領しているため、椅子を配置しにくい。③暖炉のような部屋の中心になるものがなく、「応接セット」自身が中心にされた。④「応接セ

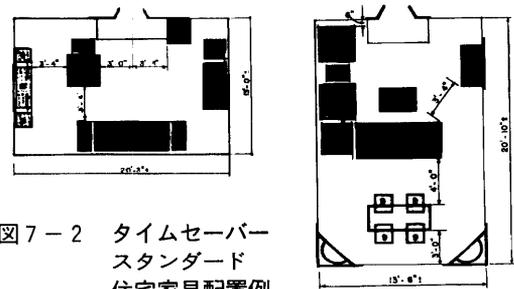
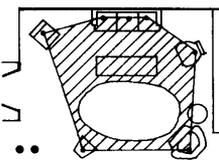
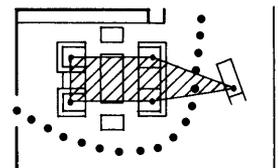


図7-2 タイムセーバースタンダード住宅家具配置例

リビングルーム例

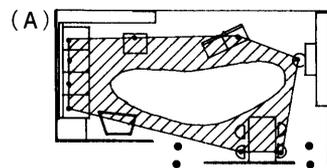


SILLS HOUSE, TAC, 1951

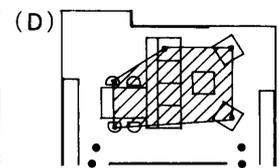


若手建築家設計住宅, 1962

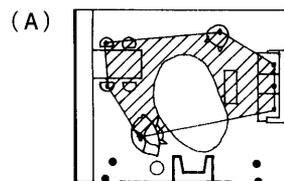
リビング・ダイニングルーム例



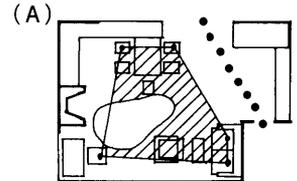
全米住宅協会コンペ1等案, 1951



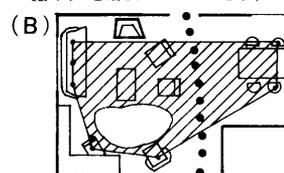
中堅建築家設計住宅, 1954



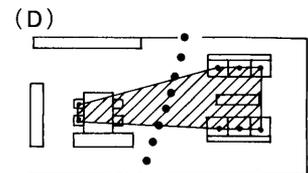
全米住宅協会コンペ入選案, 1951



日本電建住宅, 1960



エイコン・ハウス, C. コッホ, 1950



中堅建築家設計住宅, 1962

表7-2 居間およびリビングスペースの家具配置

	(%)	
	壁際利用型	中央利用型
米	81	19
日	35	65

表7-3 リビング・ダイニングルームにおける干渉域と残余床

	(%)			
	(A)	(B)	(C)	(D)
米	62	22	13	3
日	16	5	19	60

図7-3 干渉域と残余床(同縮尺による日米比較)

ット」の製造・販売が盛んであった。⑤自由な家具配置についての説明、啓蒙がなされなかったⁱ¹⁵⁶⁾。⑥四周が襖であったため部屋の中央に集まらざるを得なかった和室の生活習慣が続いている。⑦立面を内部とは関係なく独立して純粋にデザインできることを建築家が望んだ(4章最後段参照)などが考えられる。

8. まとめと展望

本研究では、まず、当時のアメリカの文献から、アメリカの近代住宅の考え方、平面原理を明示した。次に、それらの情報が、雑誌や展覧会などの媒体によって戦後の日本に伝達され、当時の建築家や研究者による住宅の近代化を強力に促進した一因となったことを明らかにした。同時に、指導的立場にあった建築家の住宅作品においてアメリカ近代住宅の影響が顕著に見られ、それが一般の戸建住宅にも普及していったと思われる。また、そのような変化の中で、玄関や縁側などの伝統的な中間領域の消滅、子供室の孤立化、浴室の密室化などが生じ、接客時や家族間のコミュニケーションとプライバシー調節の様態が変化したこと、また、リビングルームでの家具利用に日米の意識の違いがあったことを指摘した。今回研究対象とした戦後の20年間は、占領下においてアメリカ文化の強い影響のもとに復興が行われた時期であり、4章で述べたアメリカ近代住宅の情報によって性急に促進された住宅形式の転換は、そのような当時の特殊な状況から生じたものと考えられる。

日本の住宅形式の形成過程において重要な意味を持つアメリカ近代住宅の影響が、その後発展してきた現在の住宅において、どのように反映されているかを検証するため、現代住宅の平面を収集し分析を行ったⁱ¹⁵⁷⁾。現在の住宅において、定着しているアメリカ的要素には、①リビング・ダイニングルームと個室の公私室分離型平面、②リビング・ダイニングルームと接続されたセミオープンな台所、③個室化した子供室がある。定着しなかったものには、①リビング直入玄関、②私的廊下、③主寝室の専用浴室、④フレキシビリティの高い子供室がある。その結果、①玄関と各室は公的廊下によって結ばれ、②浴室・洗面所・便所はその途中に設けられる傾向があり、寝室と浴室の緊密な関係にこだわらない。③子供室は育児対応の考えに乏しい、という状況になっている。そのほかの特徴に、①リビングルームの続き間として和室がある。これは椅子生活を補足する多目的室であると思われる。②1～2台の駐車場を設けるといふ敷地条件から、③おおむね2階建て。1階が公室部分に、2階が私室に充てられ、更に、敷地が狭あいになると、上下反転して2階が公室に、1階が私室に充てられることが多い(図8-1～4)。

現在の住宅において、アメリカ近代住宅の影響が残存

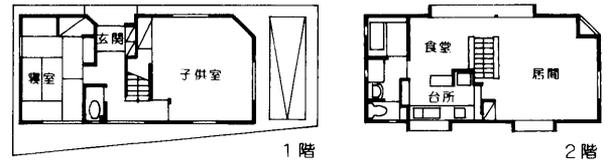


図8-1 中堅建築家設計戸建住宅(木造), 1994

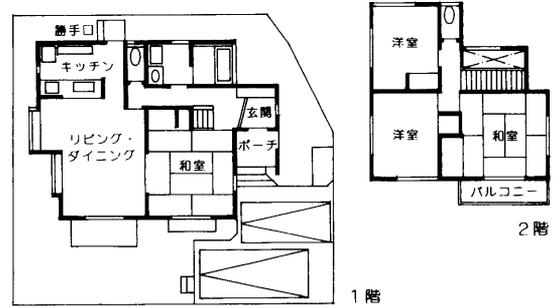


図8-2 工務店設計施工分譲住宅(木造), 1994

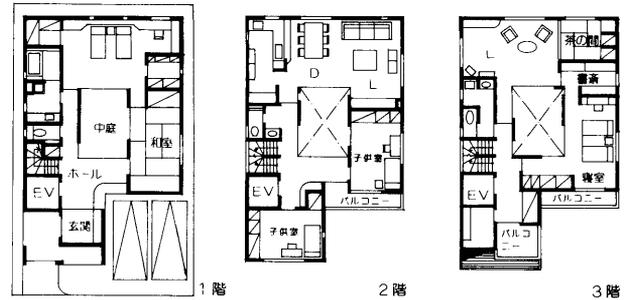


図8-3 大手住宅メーカー戸建商品住宅(S造), 1994

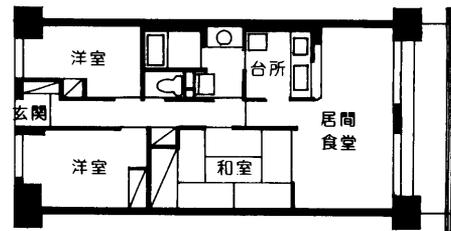


図8-4 大手不動産会社分譲マンション(RC造), 1994
している点もあるが、伝統的な中廊下型へ回帰している傾向も見られ、半世紀にわたる変化の中で上述したような住宅形式に収れんしていると思われる。しかしそれは、戦前に見られた段階的な和洋の融合と違い、戦後の急激なアメリカ化による短絡的な和洋並存の結果であり、そこで失われた生活的欲求から便宜的に作り出されたもので、確定的なものとは考えにくい。日本の経済的条件も向上し、住宅設計を取巻く環境も比較的自由になった現在、この研究報告の中で触れた、幾つかの問題も含めて、新しい解答を求め得る機会がきている。現代の住まい手を対象とした試行的なアンケート調査ⁱ¹⁵⁸⁾によると、中高年のほうがアメリカ的な生活様式を受け入れる傾向があり、むしろ若年層に伝統的な暮らしの良さに対する関心があるという結果が得られているⁱ¹⁵⁹⁾。今回の研究では、住宅設備の進歩や家庭用電化製品の普及による生活

の変化,あるいは住まい方の視点からの分析は行わなかった。今後は住まい手の実態調査を更に進めながら,この研究を日本人に,より適した住宅形式の原型提案に結び付けることが課題である。

<謝辞>

終りに,本研究を進めるに当って網戸武夫,鈴木彰,西島泰親,北沢興一,北沢司郎,落合庸人,内田青蔵,小西章子,高槻正智,志村照太郎,三越資料編纂室,高島屋史料館,竹中工務店,大林組の諸氏に貴重な情報・資料の提供,面接調査,見学などの便宜を与えて頂いた。ここに記して感謝の意を表する。

<注>

- 1) 自邸における実験。「少ない家具と座れる床材の工夫」(本文8章参照)による椅子座,床座の融合した居間を提案。藤木忠善:すまい 設計要旨,新建築 VOL.40, NO.1, pp.203-213, 1965.1 次に浴室の密室化(本文6章参照)をさける実験,1階台所の吹抜けに面して配置した2階浴室の室内窓から台所やダイニングルームの家人と会話ができる立体的な解決を提案。藤木忠善:300立方メートルの家(池原邸 1971/蔵野邸 1970),都市住宅 住宅第3集, pp.24-35, 1972.12
- 2) 日本の伝統と西欧の建築様式との折衷による武田五一,藤井厚二,堀口捨己,西欧近代建築の「明朗性」と数寄屋を融合した吉田五十八らの仕事,1916年「住宅改良会」1920年「生活改善同盟会」が発足,続き間型住宅に「中廊下」を採用した日本の「洋風住宅」の提案,更に,椅子式生活,ホール型平面などの洋風生活の部分的導入などを指す。文献10)
- 3) 大正から戦前までを第1期(1920-1944),戦後期を第2期(1945-1964),高度成長期を第3期(1965-1984),現代を第4期(1985-)と区分。本研究では,戦後の政治状況を背景としたアメリカの情報移入が盛んであった第2期を中心に扱った。
- 4) 家庭の社会性に関するアメリカ留学経験者の発言。「ファミリーといっても一つの社会で,自分の部屋から出れば社会なのです。(中略)そういう社会人としての教育を家の中でしている。»,座談会「家族制度を衝く」,婦人公論, pp.16-24, 1946.5
- 5) 日常生活の合理化を促す記事。高橋雅子:アメリカの生活科学に学ぶ,婦人公論, pp.58-61, 1946.6, 帯刀貞代:生活の科学化について,婦人公論, pp.23-27, 1946.8.9
- 6) The Architects Collaborative. 1945年結成された建築家の共同体。Six Moon Hillの住宅群によって日本に影響を与える。国際建築, pp.20-31, 1951.1
- 7) 雑誌 Arts & Architecture が後援。1938年からこの雑誌の編集者,発行者となった J.エンテンザが,1945年プログラムを発表。1945年から1966年まで,36のプロジェクトのうち25の住宅が実現。使用人のいない核家族のための平面計画と,進化した技術に対する探求が目的。
- 8) 1945年,平均的な核家族のための,経済的で実用的な小住宅のコンペ。アメリカ国内外から967案が提出。審査員に J.O.メリルの名がある。入選案24案のうち10作品がモデルハウスとして,シカゴ郊外の新興住宅地「Deer Park」に建設。文献5)
- 9) ニューヨーク近代美術館の彫刻ガーデンに, M.プロイヤー設計の「生長する家族のための住宅」を展示(図3-2)。開催期間は1949年4月から10月。都市近郊に住む中流所得者層が購入可能な住宅を提示することが目的。子供の成長とともに変化する住様式に対して,寝室の増築及び機能変更の柔軟性を持った平面計画を示す。文献6) 7) 8)
- 10) 全米住宅協会 (NAHB: The National Association of Home Builders) と the magazine of BUILDING の共同主催。1951年3月号同誌上にて結果発表。審査委員長は Pietro Belluschi (MIT 建築科長)。18m×30mの敷地に建坪約90㎡の独立住宅が求められた。小住宅の環境改善と,建築家と住宅業者の協力体制の確立が目的。多目的室,通路空間を拡張し,子供の遊び場や洗濯場として二重利用できる作品が評価された。1等入選は B.ウォーカー, HOUSES DESIGN COMPETITION, the magazine of BUILDING, pp.103-162及び pp.204-220, 1951.3, アメリカ住宅懸賞設計,国際建築, pp.22-35, 1951.8/pp.40-47, 1951.10
- 11) アメリカ建築家協会 (AIA: American Institute of Architects) と雑誌「House and Home」の共同主催による住宅コンペ。1960年に開催。1等案は, R.コールの設計(図3-4)。商品住宅として量産可能なように,構成部材の規格化がされている。文献1), p.101
- 12) ほうろう引き鉄板の規格パネルを用いた「ラストロン・ホーム」を製造。耐久性,耐候性,断熱性にすぐれ,1947年から49年の間に3000戸余りを販売。1949年 C.コッホを招き改良を加え低コスト化を図るが,不成功に終わる。文献7)
- 13) 1958年全米住宅協会はテネシー州ノックスビルに実験住宅を建設。単一規格の木製プレファブパネルによる乾式工法を採用。工期の短縮化を図る。文献1), p.71
- 14) 奥出直人:アメリカンホームの文化史,住まいの図書館出版局,2.バンガローハウスの登場, pp.151-160, 1992
- 15) ここでの西欧型平面とは,主に日本に影響を与えたと思われるイギリス,ドイツの住宅平面をいう。
- 16) アメリカ近代住宅の特徴の特定に当って,予備調査として行った西欧住宅平面の分析より明らかになった特徴。英,独,仏,伊の1930, 1950, 1960年近辺の独立住宅平面を国別・年代別に計150例,海外雑誌(英: Architectural Design, 独: Bauen + Wohnen, 仏: L'architecture d'aujourd'hui, 伊: Domus ほか)から収集。本文中に掲げた特徴は主として英,独である。
- 17) 復刊:新建築/1946年,国際建築/1950年, 創刊:建築文化,土建情報(後の近代建築)/1946年,暮らしの手帖/1948年,建築技術/1950年,モダンリビング/1951年
- 18) 創刊以来,1962年まで小山正和が編集長を務める。この間,編集に当たったのは,浜口隆一,市川清,生田勉,加藤渉,小林陽太郎,野生司義章,田辺貞人,津島次夫,碓井憲一,山形光雄,山本学治,吉阪隆正である。復刊後は小山の尽力で,『Architectural Record』,『PROGRESSIVE ARCHITECTURE』,『Architectural Forum』,『Architectural Review』,『Arts & Architecture』のアメリカ主要5誌の資料提供の協力を得た。
- 19) 朝日新聞社主催,外務省,文部省などが後援。1950年3月18日から6月11日まで,阪急西宮球場一帯で開催。入場者数は延べ200万人を越す。「家庭」「生活」などのテーマ展示が行われ,6点のモデルハウスと1点のトレーラーハウス,家電,台所用品などが出品された。平井常次郎編:アメリカ博覧会,朝日新聞社,1950.
- 20) 竹中工務店設計(担当:小川正)のモデルハウスは, C.コッホの住宅を原案にし,延べ面積28坪。家具,照明も専用にデザインされる。大林組設計のものは,木造2階建て,延べ面積25坪。新建築, pp.140-141, 1950.5, pp.179-180, 1950.6 建築文化, pp.7-11, 1950.8
- 21) 建設省住宅企画課,蔵田周忠,荒川孝善,久米権九郎,伊藤喜三郎,吉家光夫,井関正監修:特集・経済的な家の建て方,主婦の友, pp.239-251, 1950.6
- 22) DEPENDENTS HOUSE に関与した建築家のその後の活動。網戸武夫「実験住宅 R-121」国際建築, pp.36-45, 1952.4 金子徳次郎「軽金属で造った工場生産の家(計画案)」モダンリビング, p.14, 1951.7 また網戸がチーフとなって,日本人スタッフで「D.B. Designer Association」を結成。このグループの提案が1948年7月,日本橋三越本店において「アメリカに学

- ぶ生活造型展」(世界日報新聞社後援)として実現。ここで、網戸はアメリカ中流住宅を、家具、照明を含めて忠実に再現。工芸ニュース、pp.26-27, 1949.11, 住と建築, p.26, 1991.7
- 23) 浜口ミホはノイトラの住宅を例に「入り口からまず居間に入り、それから家族の寝室に入る。」と述べ、近代的住宅の条件とした。建設省編：明日の住宅と都市, pp.108-130, 彰国社, 1949
- 24) 民主的な家族のための居間のあり方について、「居間は一家だんらんの生活の中心、来客は二次的に考える。」室内設計研究会(内藤正哉ほか)：居間・応接間の位置と構成, ニューハウス, pp.95-96, 1962.1
- 25) 椅子式食卓を推奨した記述として、「座式の食事様式を腰掛式にしなければならない。」がある。浜口ミホ：日本住宅の封建性, p.41, 相模書房, 1950.
- 26) 子供の個室化を推奨した記事として、「狭い家にも子供の勉強室を、モダンリビング, pp.49-51, 1951.10
- 27) 「最近の厨房は完全に電化されて居り、扱う食物も加工食品が主であるから居間の内に取り入れるか、判然としない程度の仕切りで居間に隣接させる形式のものが多し。」桜井省吾：戦後に於けるアメリカの建築設備展望, 建築雑誌, p.14, 1949.7
- 28) 収納の合理化として造付け家具の有効性を推奨しているものに、村瀬敬二郎：暮しの手帳別冊『すまいの手帳』, p.88, 1950 水之江忠臣：NO FURNITURE—ジョージネルソンによるビルトイン家具の提案, 国際建築, pp.64-65, 1960.9
- 29) 「毎日のフトンの上げ下ろし、何時でも休息できる便利さ、床面から高く上がって寝ることによる衛生面及び暖かさの点、等々すべての点で(ベッドが)優れている。」, 文献11), pp.59-61, 武田ます：安らかな眠りのために、朗, pp.49-51, 1959.2
- 30) 洋式便器、便所の水洗化を推奨するものとしては、李家正文ほか：トイレット設計へのエキス, ニューハウス, pp.81-86, 1964.5
- 31) アメリカの住宅照明が、シャンデリアあるいはペンダントなどが衰退し、天井内に蛍光灯、スポット・ライトなどを納めた半間接照明法へ移行などを紹介したものに、桜井省吾：注27)論文, 建築雑誌, p.15, ほかに、文献11), p.120, 文献12), p.140
- 32) 代表的なものに、雑誌『新建築』による小住宅コンペがある。1948-49年にかけて計4回行われ、おのおの「極小住宅」「家庭労働の削減」「育児」「整理・整頓の合理化」などの課題を提出。審査員は4回を通じて、池辺陽、清家清ほか。文献10)
- 33) 「モダンリビング」, 「朗(後に、ニューハウス)」などがある。計画案を通して、住宅近代化を一般に紹介する役割を果たす。「生活を豊かにする設計図31種」モダンリビング, 1951.7 アメリカ近代住宅の翻案の例としては、「フィリップ・ジョンソンのグラスハウスより」, 「T A Cの傾斜地住宅より」, モダンリビング, pp.58-61, 1951.7
- 34) 志村太七, 松本巍, 網戸武夫, 渡部安吉, 上田清作, 平野次平, 近藤義雄, 渡会正彦, 原初五郎, 小坂道隆, 野村六郎, 小栗玄, 神田貞次郎, 西原脩三, 文献13), ENGINEER SECTION, F.E.C : Dependents housing/Japan & Korea.
- 35) Antonin Raymond/1910年渡米, 1919年F.L.ライトとともに来日。東京に事務所を設立。1948年戦後再来日。
- 36) 坂倉は、発表誌の設計要旨の中でこの住宅を「最小限住宅」と位置付けている。新建築, pp.17-23, 1950.2
- 37) ローコスト住宅の試み。標準タイプのバリエーションとして計画される。新建築, pp.26-31, 1952.10
- 38) 1978年に東急ホームが発売した商品住宅「シェシェール120N型」には、2階私室ゾーンへの浴室の配置、ウォークイン・クローゼットなどが見られる。都市住宅, pp.86-89, 1985.10
- 39) 建築家による平面は、影響力のあった重要作品選出のために、文献15,16,17), 及び「日本建築学会編/建築設計資料集成6・建築—生活, 丸善, 1979」, 「コンパクト建築設計資料集成, 丸善, 1986」の5冊中、2冊以上に選出されている住宅から1945-64年の期間で49例を選出。当時の一般的傾向を示す平面として、住宅金融公庫平面は「木造住宅平面図集(改訂版), 新建築社, 1957」から、住宅会社平面は「中小住宅百図集改訂版, 日本電建出版部, 1954」から、20坪以上の住宅をそれぞれ77例, 49例を選出。
- 40) 平面構成図を上中下に分け、上段を私室ゾーンとして個室を、中段は公室ゾーンとそれに付随する部屋、そして下段は出入口にあたる部屋のみを示す。女中室, 洗面所, 化粧室, 納戸は省略。公的廊下及び私的廊下は本文3章参照。本文⑤については、続き間であっても家具で部屋の機能が確定している場合は個室と見なす。⑧については注43)参照。
- 41) 換気設備の機械化によって、自由なプランニングが可能になるということについて、文献12), これからの台所, p.121. また、作業の場所を快適にするために、台所の換気が必要であるということについて、文献11), 家事作業, p.70
- 42) 「プライバシー不完全な個室のメリット」として伝統的な縁側からのアクセスの良さを採り入れ「家族同士のコンタクトの機会が多い子供や老人の部屋」の提案がある。藤木忠善+アーキブレーション建築研究所：星田アーバンリビング入選案「設計要旨」, 星田アーバンリビング・デザイン・コンペティション作品集 pp.138-139, 大阪府建築部, 1988
- 43) 浴室と洗面所・便所が隣接し、直接相互に行き来できるもの。または、独立した洗面所が設けられている場合には、その洗面室から浴室と便所双方に行けるものなどを指す。
- 44) 大正期の木造小住宅においても、2階私室ゾーンへの浴室配置は幾例も見られる。W.ヴォーリス：吾家の設計, pp.71-72, 1923. 菊池重郎：西村伊作と文化住家(その2), 建築界, 第18巻, 1970.9
- 45) 家庭内における不慮の事故による死亡者は、1983年の統計では総数6,202人である。その死因は、1-4歳の50%が溺死, 65歳以上の20%が同一床面でのスリップである。厚生省大臣官房統計情報部：不慮の事故及び有害作用死亡統計, 1985
- 46) アメリカ近代住宅の影響と異なる流れに、縁側を生かした清家清の森博士の家1951, 斎藤助教授の家1952, 畳による現代の住まいを提案した丹下健三自邸1953, 内田祥哉自邸1961がある。
- 47) プライバシーが穏やかに変化する空間の区切り方が良いとする「プライバシー段階論」に基づく考え方。藤木忠善：サニーボックスから300立方メートルの家へ—自己検証覚書, 都市住宅, pp.58-59, 鹿島出版会, 1982.1
- 48) 表7-1の分析対象平面について、日本例は注39)に基づき、配置図が表記されている建築家及び住宅会社設計の平面から選出(39例)。アメリカの例は、建物規模、敷地面積が日本のものに近く、配置図が表記されている例として二つのコンペから選出(45例)。コンペ概略は、注8), 10)参照。
- 49) 全米住宅協会主催コンペ(注10)で、居間は玄関に対して後方に配置するか、プライバシーの確保のために何らかのもので遮らなければならないという指摘が審査評にある。the magazine of BUILDING, p.109, 1951.3
- 50) 縁側の効用について。藤木忠善：「縁側」コミュニケーションのためのオープンスペース, 月刊子ども会, pp.10-14, 全国子ども会連合会, 1993.5
- 51) 1948年ニューヨーク近代美術館で開催された国際家具コンペ。小住宅に適する安価な家具のデザインの向上を掲げ、工業化・システム化、軽量化など合理的なコンセプトを持つ作品が入選、実際に量産された。入選者にD.R.ノル, C.イームズ, 審査員にはM.v.d.ローエがいた。EDGAR KAUFMANN, JR : PRIZE DESIGNS FOR MODERN FURNITURE from international competition for lowcost furniture design, THE MUSEUM OF MODERN ART NEW YORK, 1950
- 52) JOHN HANCOCK CALLENDER, (EDITION IN CHIEF) : TIME-SAVER STANDARD-A HANDBOOK OF ARCHITECTURAL DESIGN, McGRAWHILL BOOK COMPANY, 1966 (4th edition)
- 53) 家具配置の分析に使用した平面は、日本例は注39)に基づき、平面図上に家具が表記されたものを選出(50例)。アメリカの例

は、対象期間の『国際建築』に発表された住宅のうち、平面図上に家具が表記され、20坪以上の床面積を持つものを選出(51例)。表7-2中のリビング・スペースとは、部屋がリビング・ダイニングルームの場合に、リビングルームとして使用されていると推測される部分を指し、そこに配置された家具のみを対象とした。

- 54) 「家族それぞれが何かをしながら、落ち着いていられる家族室」として、タタミコーナー、デスク、食卓の三つの溜まりによる「対話しやすい3角形を持つ家族室」を提案。藤木忠善+アーキブレン建築研究所：星田アーバンリビング入選案「設計要旨」、星田アーバンリビング・デザイン・コンペティション作品集、pp.138-139、大阪府建築部、1988 「応接セット」の批判的考察に、青木正夫：明治以降の住様式の変化・発展に関する一考察、住宅建築研究所報、p.48、1985、鈴木成文：住文化の持続と変容—計画の立場からの日本住居現代史、住宅総合研究財団研究年報、p.45、1988
- 55) リビングを家族全員のくつろぎの場とするには十分な収納が必要であると、工場用システム整理棚による壁面を提案。藤木忠善：自邸—サニーボックス 1963、都市住宅 住宅第3集、p.19、1972.12 アメリカでも1950年代にリビングルームを有効な多目的室とするための収納家具「ストレージ・ウォール」が提案されている。文献1)、p.232
- 56) 中央利用型を否定し、壁際利用家具配置を推奨したものに、「応接セットなる概念をなくし、居間の家具は分散配置に徹する。対面座式をやめる。」、松村勝男：文献12)、pp.179-181 「長椅子と安楽椅子はテーブルを囲んで向かい合わせにと決まってきた形に配置する心配はなく、自由に配置したほうが良い」、伊藤喜三郎、朗、p.70、1959.7
- 57) 戸建住宅・民間マンションのサンプルは1994年6月に発行された全国の新聞折込み広告から192例を収集。建築家設計住宅は一般向け住宅情報誌である「新しいすまいと設計」(扶桑社)1994年3~9月から総数40例の都市住宅を選出。これらに見られる一般的傾向を反映した住宅のうち典型例を掲げた。
- 58) アンケート方式による意識調査。無作為に抽出した135人を対象とし、1994年8月に実施。36の質問項目を用意。質問内容は6章で定義されたアメリカ的傾向の平面的特徴を基本に、これとは反対の日本の伝統的住様式や理想的住様式を織交ぜて設定。住生活への潜在的欲求の顕在化が目的。回答者年齢層10~60代を20歳ごとに区分した年齢層別と、集合住宅と戸建て別に集計した。
- 59) 玄関にプライバシーを求める回答が多数あり、「住まいの散らかり」等がその理由。「一続きの食堂と台所」に対して若年層は肯定的だが、高年層は否定的。「台所の散らかり・料理の油汚れ」がその理由。全世代で「畳の部屋が一部屋は必要」と回答。若年層では日本の伝統に対する憧れ、中・高年層では「来客時に便利・客間として使用」などの機能面を理由に挙げている。縁側やコタツの住まい方に「季節感がある」など若年層が関心を持ち、中・高年層は「生活様式が変化した・古い」などを理由に否定的であった。

<参考文献>

- 1) Kate Ellen Rogers : THE MODERN HOUSE, U.S.A., HARPER & BROTHERS, 1962
- 2) H.Ward Jandl : YESTERDAY'S HOUSES OF TOMORROW, The Preservation Press, 1991
- 3) Esther McCoy : Case study Houses 1945-1962, Hennessey & Ingalls, 1977
- 4) Elizabeth A.T.Smith : BLUEPRINTS FOR MODERN-LIVING/History and Legacy of the Case Study Houses, THE MIT PRESS, 1989
- 5) Tribune Company : Prize Homes, WILCOX & FOLLETT, co., 1948

- 6) Peter Blake : Marcel Breuer/Architect and Designer, Architectural Record and MOMA, 1949
- 7) Peter Blake : MARCEL BREUER/SUN AND SHADOW, LONGMANS, GREEN AND CO., 1956
- 8) The Museum of Modern art : THE MUSEUM OF MODERN ART BULLETIN Volume XVI/No.1,1949, MOMA, 1949
- 9) Carl Koch, Andy Lewis : AT HOME WITH TOMORROW, RINEHART & COMPANY, INC., 1958
- 10) 西山卯三：日本のすまいII, 勤草書房, 1976
- 11) 池辺陽：すまい, 岩波婦人叢書, 1954
- 12) 清家清監修：ホームライフ5これからの住まい, 講談社, 1962
- 13) Japanese Staff-Design Branch・商工省工芸指導所：DEPENDENTS HOUSING/JAPAN & KOREA, 技術資料刊行会, 1948.
- 14) 建築：特集/アントニン・レーモンド木造建築集, 1962.4
- 15) 佐々木宏監修：新建築 新建築50年に見る—建築昭和史, 新建築社, 1975.12, 臨時増刊号
- 16) 横山正監修：新建築 昭和住宅史, 新建築社, 1976.11, 臨時増刊号
- 17) 安藤正雄ほか：建築文化 特集=日本の住居1985—戦後40年の軌跡とこれからの視座, 彰国社, 1985,12

<研究組織>

- | | | |
|----|-----------|-------------------------------|
| 主査 | 藤木 忠善 | 東京芸術大学美術学部建築科教授 |
| 委員 | 前野 崑 | 東京芸術大学美術学部建築科教授 |
| | 水沼 淑子 | 関東学院女子短期大学家政科専任講師 |
| | 田中 厚子 | クローズネスト・インターナショナル・スクール(カナダ)講師 |
| | 志村 直愛 | 東京芸術大学美術学部建築科助手 |
| | 金子加奈恵 | 東京芸術大学美術学部建築科助手 |
| | ロバート・デルパヅ | 東京芸術大学大学院研究生(当時) |
| 協力 | 平岡 善浩 | 東京芸術大学大学院博士課程 |
| | 遠藤 義則 | 東京芸術大学大学院博士課程 |
| | 棚町公一朗 | 東京芸術大学大学院修士課程(当時) |
| | 登内 徹夫 | 東京芸術大学大学院修士課程(当時) |
| | 勢山 詔子 | 東京芸術大学大学院修士課程 |
| | 長沢 浩二 | 東京芸術大学大学院修士課程 |
| | 馬立 歳久 | 東京芸術大学大学院修士課程 |
| | 市川 創太 | 東京芸術大学大学院修士課程 |
| | 米川 淳 | 東京芸術大学大学院修士課程 |